東京大学総合文化研究科・教養学部　美術博物館

資料集 3

－銅鏡－

2010

東京大学総合文化研究科・教養学部　美術博物館

東京大学総合文化研究科・教養学部　美術博物館

資料集 3

－銅鏡－

2010

東京大学総合文化研究科・教養学部　美術博物館

はじめに

このたび東京大学教養学部美術博物館収蔵資料の中から青銅鏡を集めて、資料集を制作いたしました。中国古美術品を中心とした『東京大学教養学部美術博物館資料集 1』（1985 年）、『東京大学教養学部美術博物館資料集 2　－有職装束類－』（2005 年）に続く 3 冊目の収蔵品資料集となります。

東京大学教養学部美術博物館は、1951 年に教養学部の分離横断型総合教育構想の一環として創立されました。2003 年には、旧制第一高等学校以来図書館として使われてきた建物に全面改修が施され、美術博物館と自然科学博物館を併せた「駒場博物館」の名称で、新たなスタートを切りました。現在では自然科学博物館と連携し定期的に展覧会を開催し、総合文化研究科・教養学部ならではの文系・理系の垣根を越えた活動を行っています。

現在までに集められた収蔵資料は多岐にわたり、旧制第一高等学校関連資料、梅原龍三郎氏寄贈のコプト織、中南米とアジアの考古学資料などがその一例として挙げられます。これらの資料は、教養学部文化系教員で構成される美術博物館運営委員会メンバーの尽力のもとに集められたものです。とくに東洋古美術については初代運営委員長であり東洋史・東洋考古学を専門とする三上次男氏が中心となり、少ない予算の中で収集の努力がおこなわれました。

今回収録した青銅鏡は中国、朝鮮、日本の鏡あわせて 38 面です。青銅鏡は古代から、ガラス製鏡が主流となる 19 世紀に至るまで製作されつづけていました。姿見としての実用的役割を果たすと同時に、彫り込まれた種々の紋様には、つくられた時代ごとの思想や美術・工芸の流行が映し出されています。当館収蔵鏡には中国の漢、唐、宋、遼、金代の鏡、高麗鏡、日本中近世の鏡が揃っており、数量こそ多くはないものの、銅鏡史の概要を説明するのに十分な構成となっています。考古学・古美術資料としての意義を持つだけでなく、美術博物館設立当時における三上氏らの情熱と目的意識を感じさせる資料群でもあります。

本資料集の刊行が、学術研究・教育など多方面での参考となれば幸いです。

2010 年 3 月

東京大学教養学部美術博物館
美術博物館館長　三浦 篤

例言

(1) 本書は東京大学美術博物館所蔵青銅鏡 38 面を収録する。いずれも購入または寄贈資料である。

(2) 本書収録鏡のうち、中国鏡 17 面については 1985 年発行の『東京大学教養学部美術博物館　資料集 1』に写真のみ掲載されている。本書では残る高麗鏡･和鏡とともに､既出の中国鏡についても新たに写真･実測図･拓本を追加して再録した。再録の場合､旧図録における図番号を（1985：I-42）のように示した。

(3) 本書では原則として、見開きの左頁に写真、右頁に対応する拓本と断面実測図を配した。拓本・実測図にはスケールを付した。写真の縮尺は不同である。

(4) 資料作成は以下の者がおこなった。
断面実測：岸本泰緒子、松下賢、松村亮太
平面実測・拓本・製図・写真：岸本

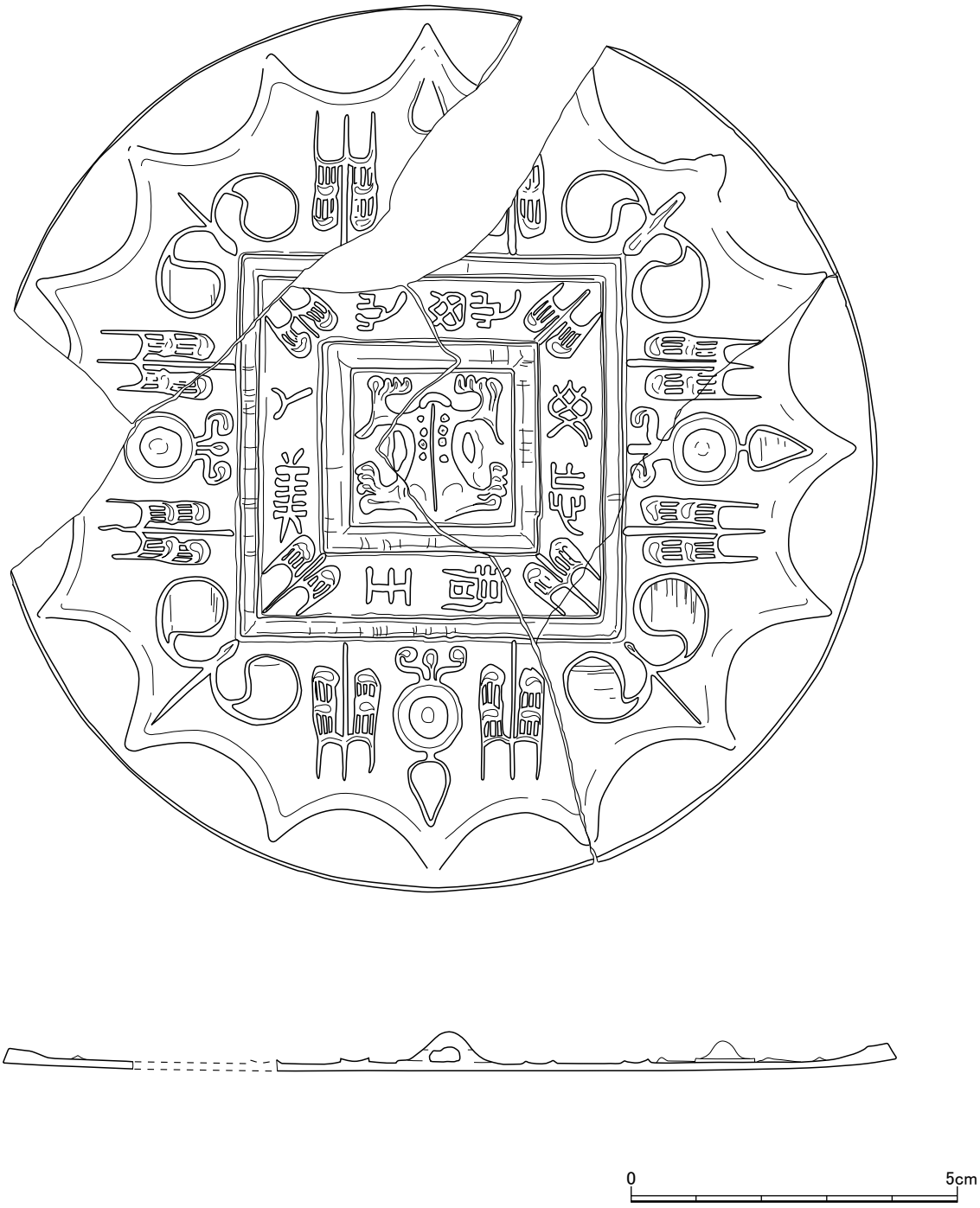
(5) 本書の編集は、折茂克哉、岸本が担当した。

(6) 本書を作成するにあたっては、下記の方々からご教示を賜った。感謝の意を表する次第である。
新井悟氏・上野祥史氏

目次

はじめに …… 1
例言 …… 2
目次 …… 3
中国鏡
　漢鏡 …… 4
　唐鏡 …… 18
　宋以降の鏡 …… 24
朝鮮半島の鏡
　高麗鏡 …… 38
日本の鏡
　和鏡 …… 66
美術博物館所蔵の鏡（岸本泰緒子）…… 76

No.1　草葉紋鏡



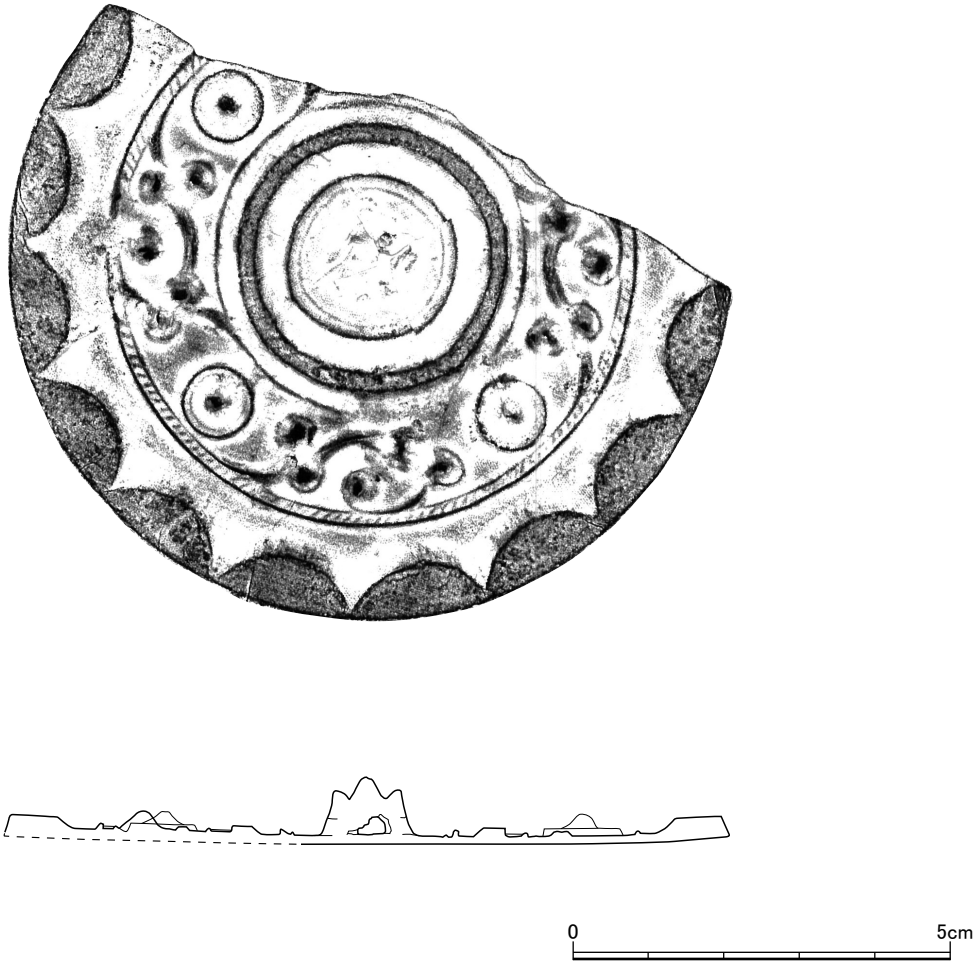
No.1　草葉紋鏡

資料番号 67-10　（1985：I-27）前漢中期　直径 13.6cm　重量 179g（一部欠損）

銘文：美人心思　毋忘君王

方格内に 8 字の銘「心に美人を思い、君王忘るること毋れ」とある。羅振玉『古鏡図録』下・一六後と同銘。鈕は獣形で表現される。銘帯四隅に麦穂状の紋様が配される。

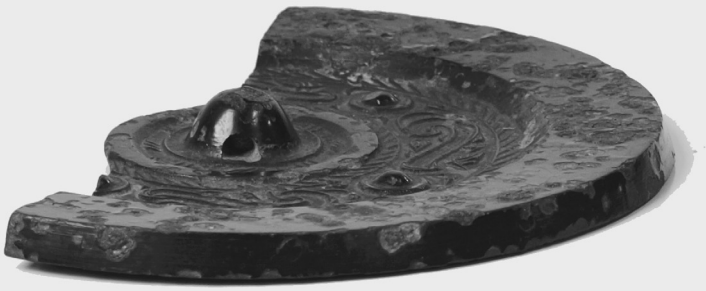
No.2　星雲紋鏡



No.2　星雲紋鏡

資料番号 67-8　（1985：I-42）前漢中期　直径 9.6cm　重量 98g（一部欠損）

約 1/4 を欠損。外縁部は十六連弧紋で、鈕は連峰鈕式をとる。鈕座は素紋の圏線と圏帯がめぐる。鋳出しが鈍く、乳や乳状突起の先端はやや模糊としている。



No.3　虺龍紋鏡 (雲気禽獣紋鏡)

No.3　虺龍紋鏡 (雲気禽獣紋鏡)

資料番号 67-7　前漢後期　直径 11.4cm　重量 202g（一部欠損）

半球鈕の周りを輻射紋と素紋圏帯がめぐる。主紋は 4 つの乳で区画され、それぞれに S 字状の雲気と小禽が配される。

No.4　四葉座内行花紋鏡

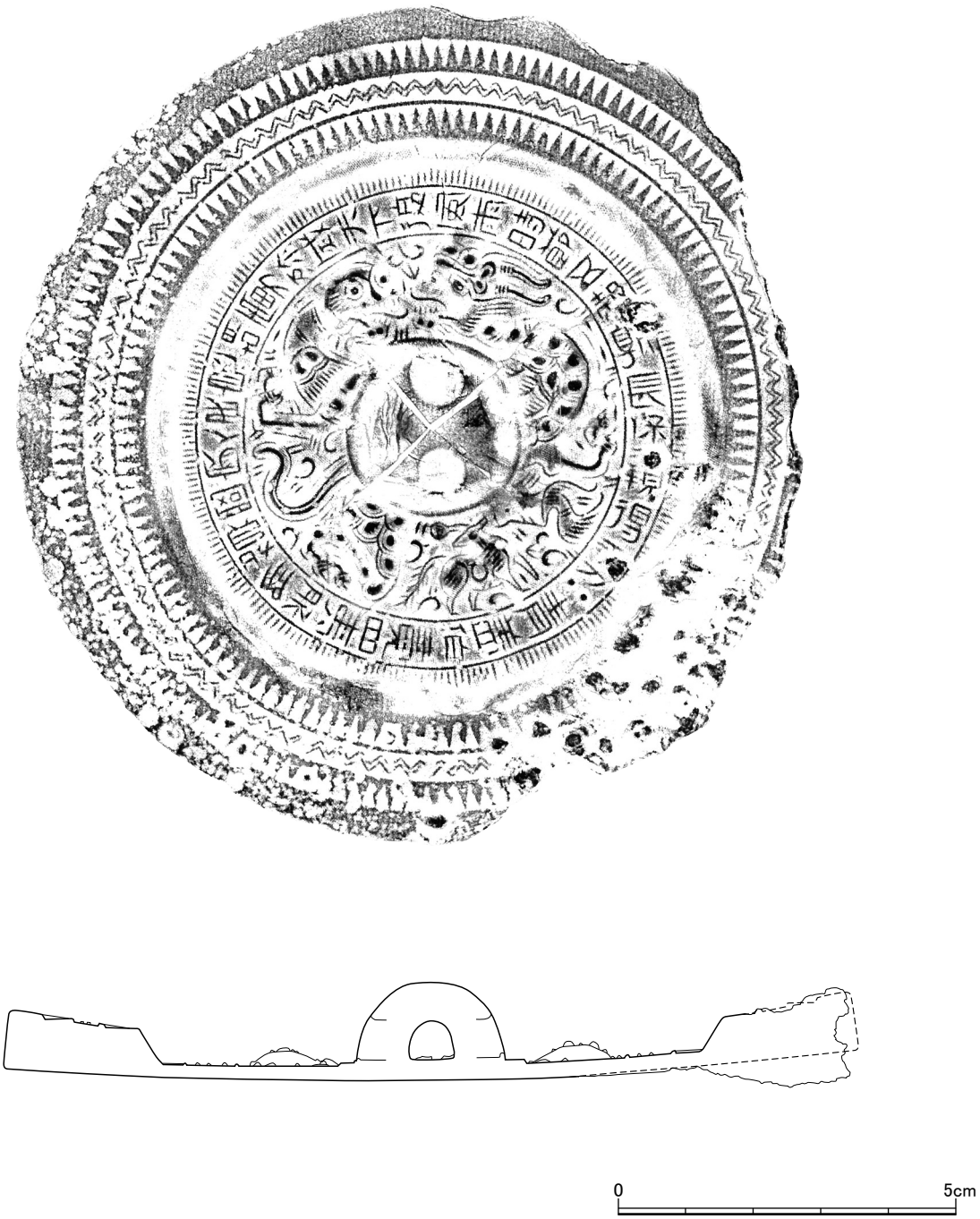
No.4　四葉座内行花紋鏡

資料番号 62-43　（1985：I-29）後漢前期　直径 24.5cm　重量 1485g

銘文：長宜子孫

四葉座の間に「長く子孫に宜し」の銘を配す。

No.5　盤龍鏡



No.5　盤龍紋鏡

資料番号 57-3　（1985：I-31）後漢中期　直径 12.5cm　重量 594g

銘文：青盖作竟四夷服　多賀国家人民息　胡虜殲滅天下復　風雨時節五穀熟　長保二親得天力

鈕の周囲に龍と虎をあらわし、足下には一角の鹿と羽人が描かれている。35 字の銘がめぐっており、大阪国分茶臼山古墳出土鏡などと同銘である。

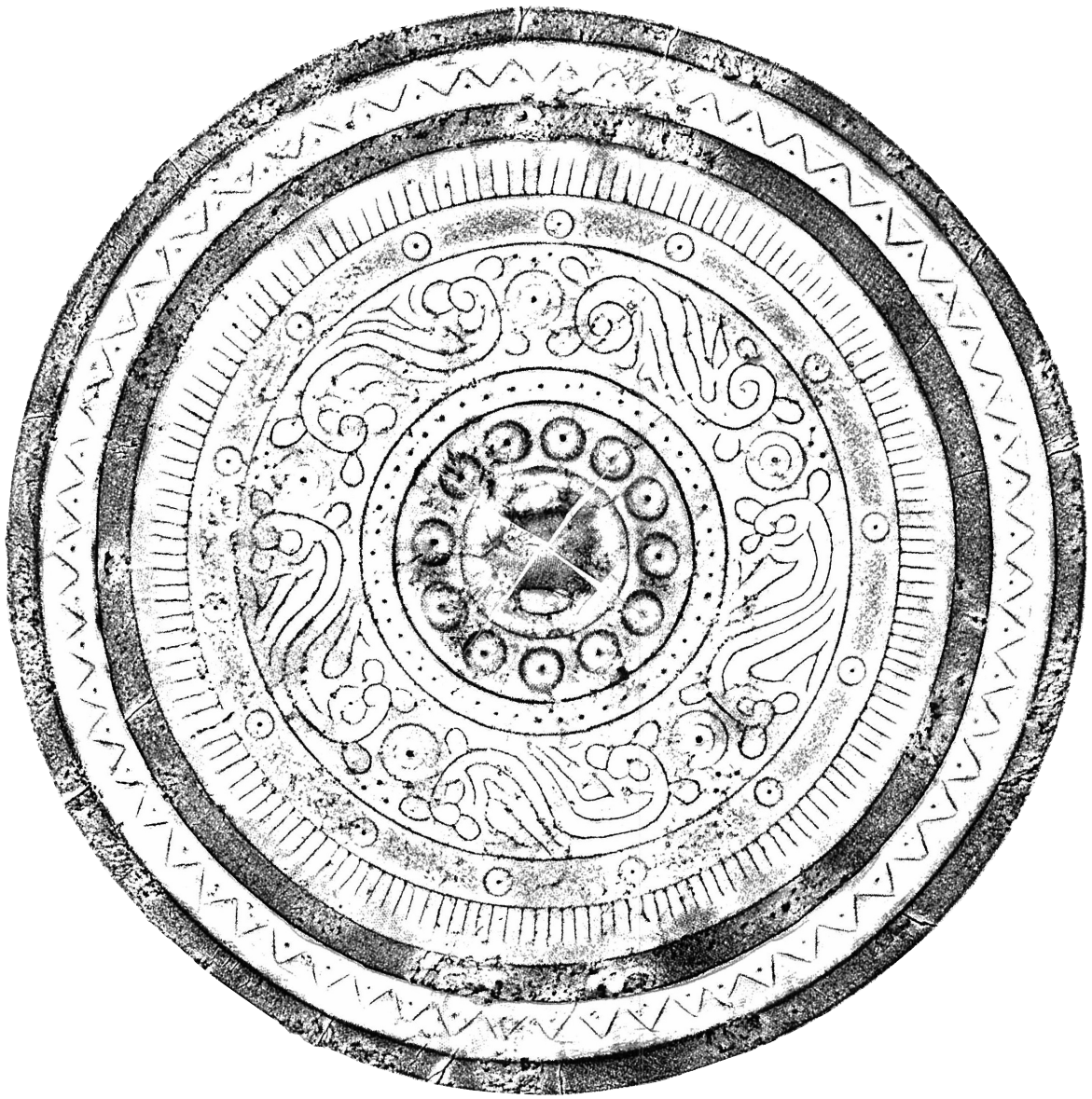
No.6　神人龍虎画像鏡

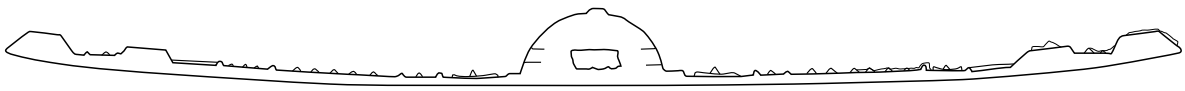
No.6　神人龍虎画像鏡

資料番号 55-8　（1985：I-32）後漢中期　直径 19.6cm　重量 773g

西王母、東王父が配され、それぞれ3人ずつの侍神が膝座している。間に青龍、白虎が対置される。

No.7　雲紋鏡（唐草紋鏡）



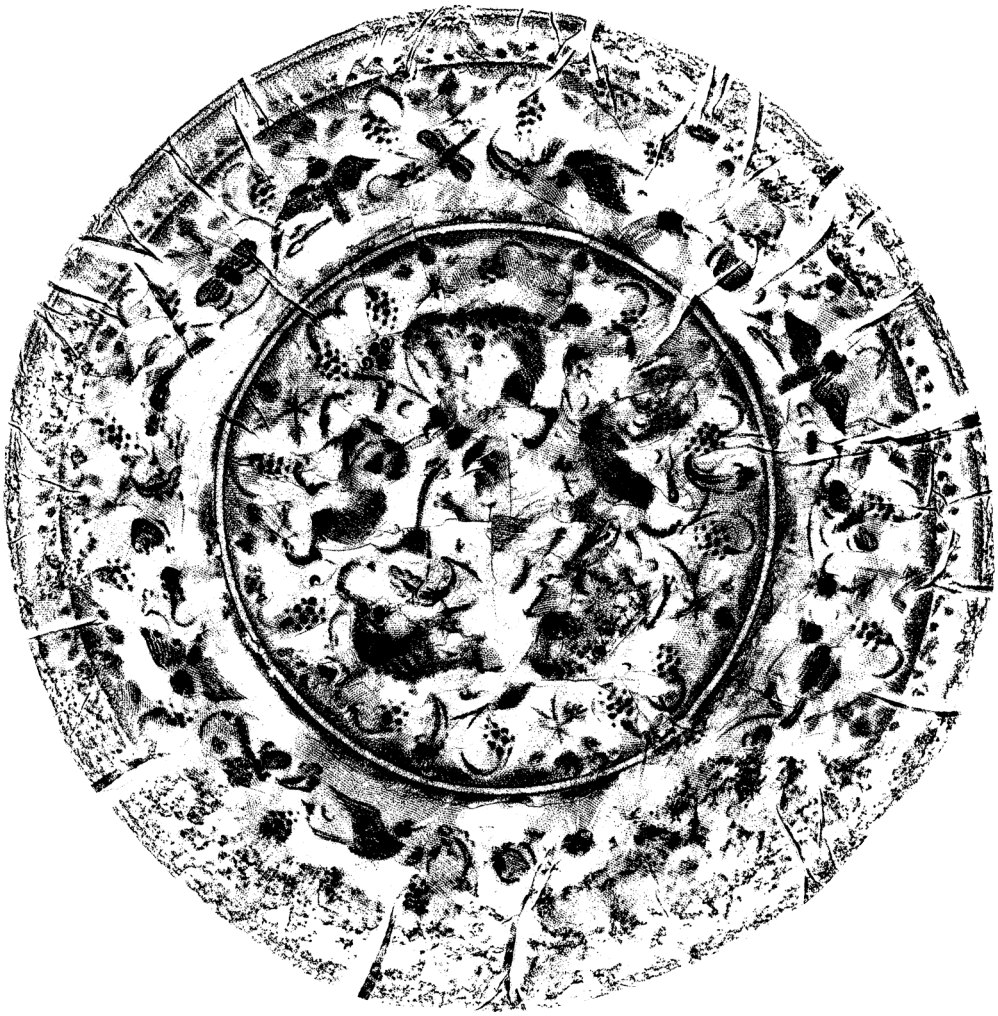


No.7　雲紋鏡（唐草紋鏡）

資料番号 62-26　（1985：I-30）三国（魏）　直径 15.6cm　重量 361g

前漢の虺龍紋鏡を復古した紋様。魏晋鏡の特徴のひとつである長方形鈕孔をもつ。主紋区は 5 つに区画され、鈕の周囲には 12 個の小乳がめぐる。

No.8　海獣葡萄鏡



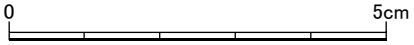
0　5cm

No.8　海獣葡萄鏡

資料番号 55-12　（1985：I-33）初唐　直径 12.6cm　重量 747g

伏獣鈕のまわりに葡萄唐草を敷き、5 体の狻猊を配す。突出した界圏の外側には波状葡萄唐草紋がめぐり、小禽、蝶、蜻蛉が配される。

No.9　三楽八花鏡



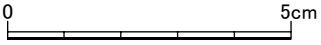
No.9　三楽八花鏡

資料番号 63-5　（1985：I-34）中唐　直径 13.1cm　重量 387g

銘文：孔夫子　問曰答　栄啓奇

孔子と栄啓期の問答場面を図案化したもの。左側の杖を持った人物が孔子である。『列子』天瑞篇にある故事を題材としており、孔子に問われた栄啓期が「人として生まれたこと、男子として生まれたこと、長寿を得たこと」を人生の 3 つの楽しみとして答えた場面を表しているとされる。

No.10　双鸞狻猊鏡

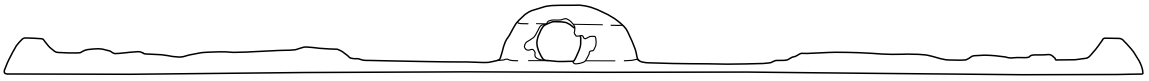


No.10　双鸞狻猊鏡

資料番号 61-4　（1985：I-35）盛唐　直径 16.5cm　重量 635g

鈕をはさんで 2 羽の鸞が対峙し、上下に狻猊を配す。鈕座は 8 弁の蓮華紋座。鏡胎は平直で、外縁のみ縁取りのように分厚くなる。

No.11　双鸞狻猊鏡

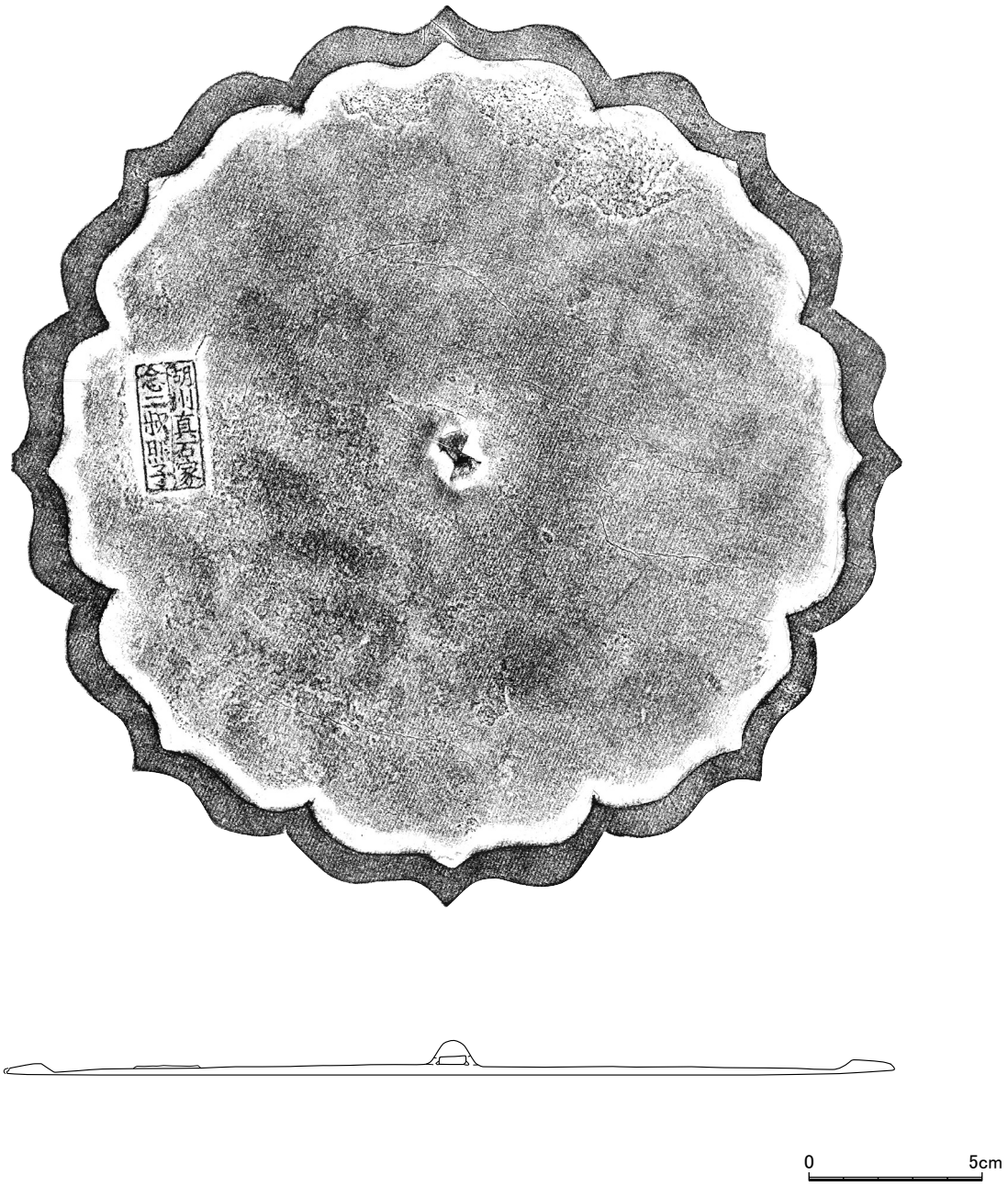


No.11　双鸞狻猊鏡

資料番号 63-8　（1985：I-36）宋　直径 22.8cm　重量 1141g

鈕をはさんで嘴に紐を食んだ二羽の鸞がおり、上下には狻猊と一角の鹿らしき獣像を配す。主紋は唐代の双鸞狻猊鏡と同様のモチーフだが、隙間に雲紋を充填している。

No.12　湖州八稜鏡

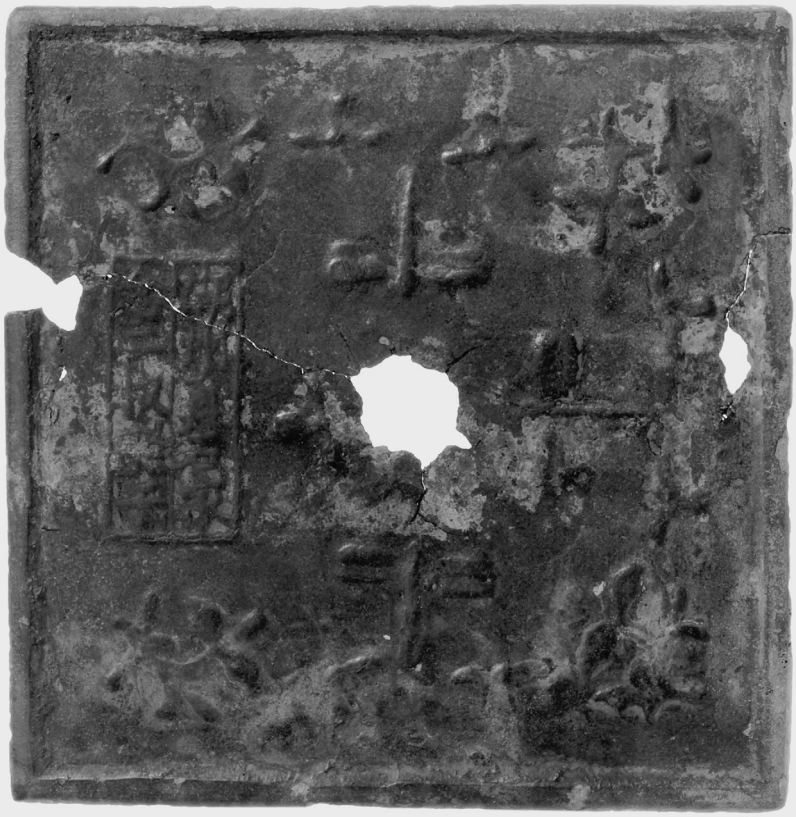


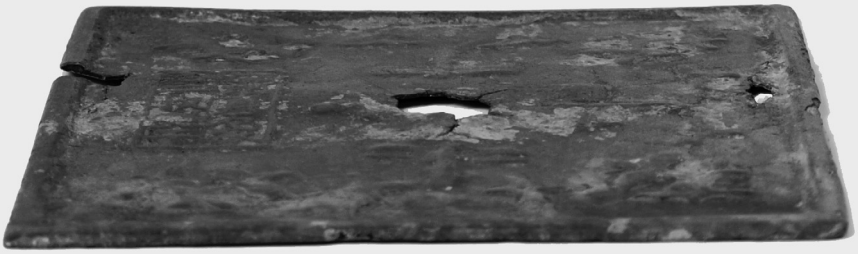
No.12　湖州八稜鏡

資料番号 65-8　（1985：I-37）宋　直径 26.0cm　重量 1057g

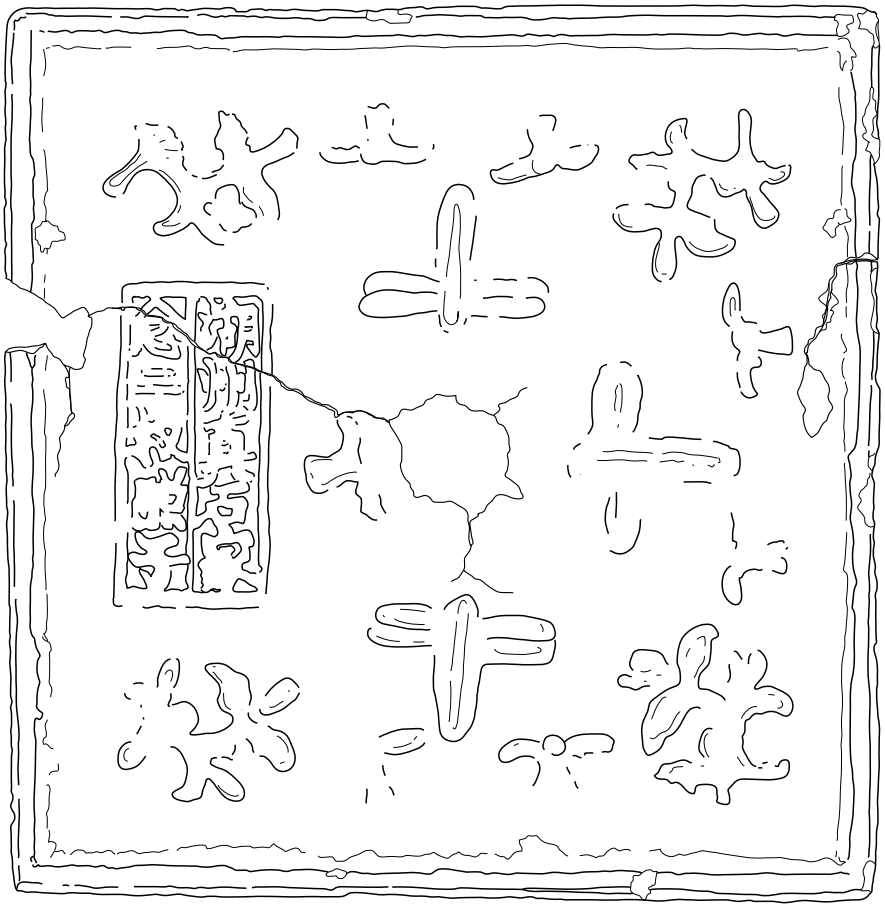
銘文：湖州真石家　念二叔照子

「湖州」は現在の浙江省呉興あたりであり、「石家」は鋳鏡者の家名をあらわしている。このタイプの銘文は、宋鏡中でもっとも多く見られるものである。





No.13　湖州蜻蛉紋鏡



No.13　湖州蜻蛉紋鏡

資料番号 63-6　（1985：I-38）宋　11.5 × 11.3cm　重量 98g（一部欠損）

銘文：湖州真石家　念二叔照子

No.12 同様「湖州」銘が入る。鈕を欠損しているが、その周囲に 3 体の蜻蛉と 1 羽の小禽をおく。周囲に花草紋様が描かれる。

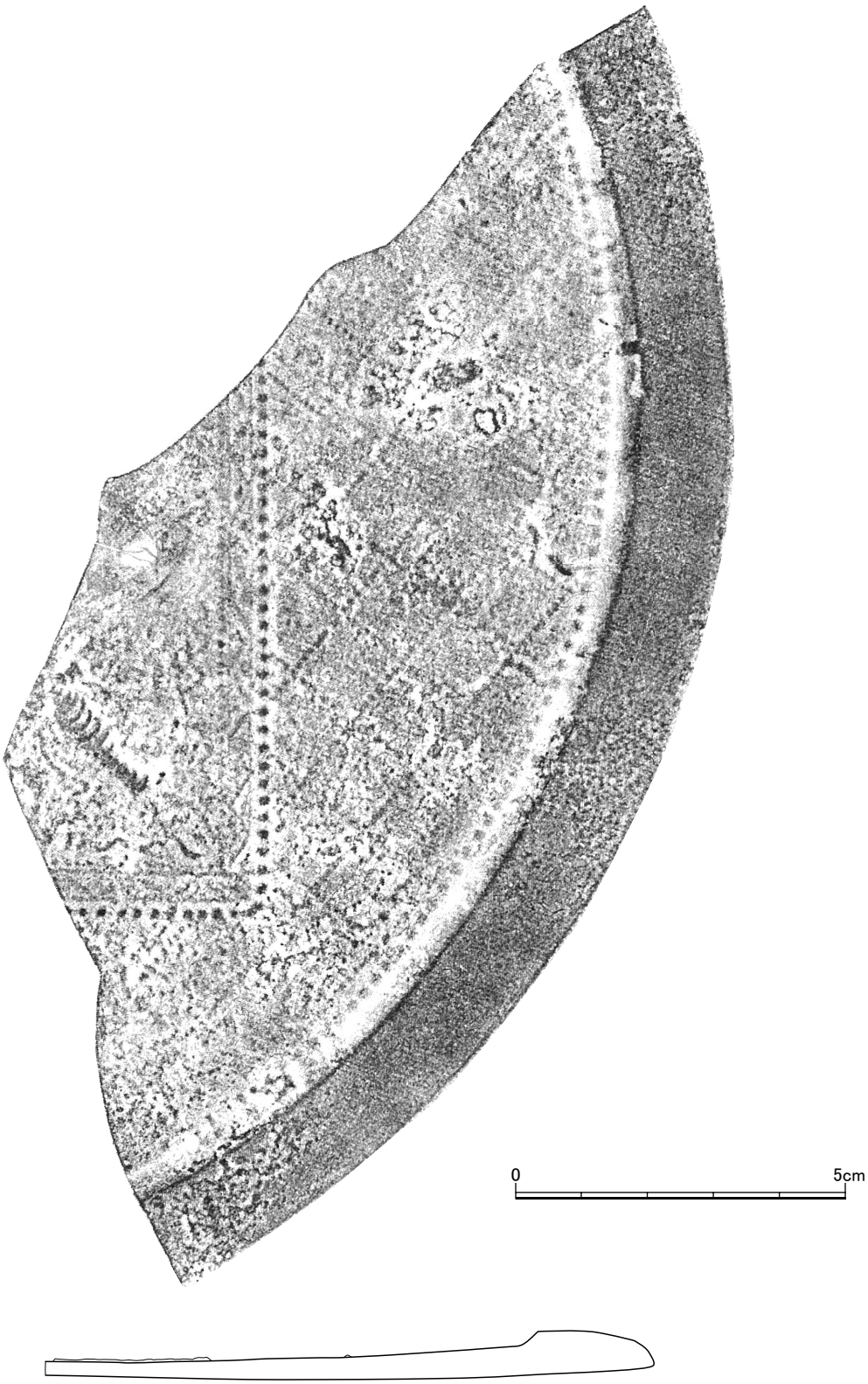
No.14　円圏規矩鏡

No.14　円圏規矩鏡

資料番号 63-14　（1985：I-39）宋　直径 12.5cm　重量 303g

漢代の円圏規矩鏡を宋代頃に復古製作したもの。円圏内には銘の代わりに雲気と芝草紋が置かれている。描線は鈍いが、朱雀や白虎の姿が見える。

No.15　四蝶方格紋鏡片

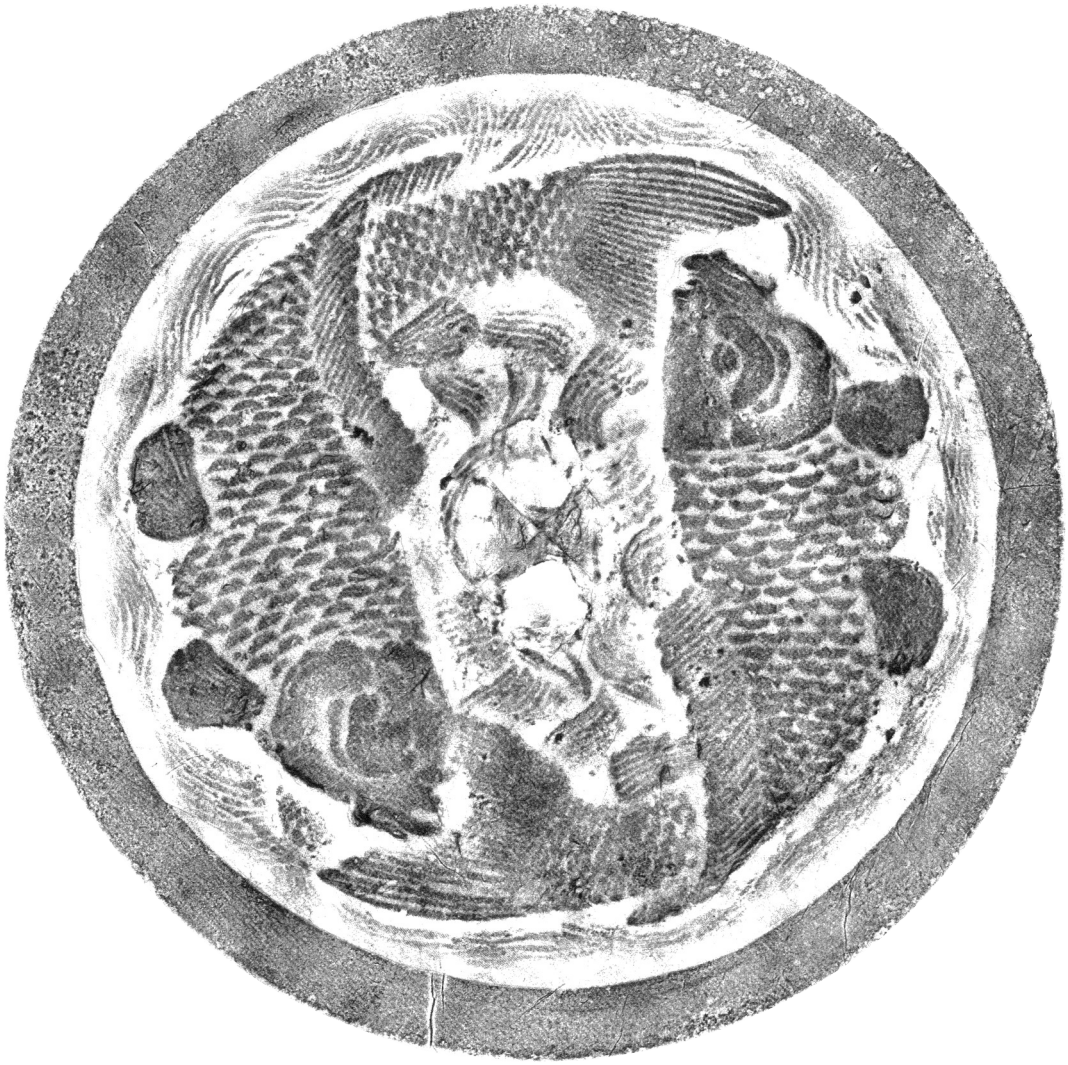


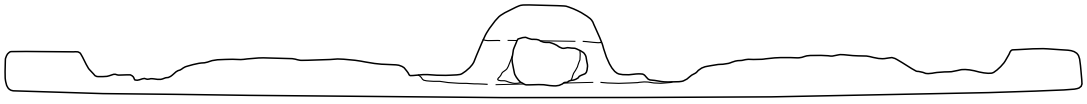
No.15　四蝶方格紋鏡片

資料番号 67-6　遼　破片長 21.0cm（復原径 28.2cm）　重量 415g（破片、金属環および紐を含む）

復原径が 28cm を超える大型の鏡。内区の方格隅に蝶が見える。方格外周と内区最外周には列点紋をめぐらせている。遼代前半期の作と考えられる。

No.16　双魚紋鏡





No.16　双魚紋鏡

資料番号 54-11（1985：I-40）　金　直径 19.0cm　重量 1389g

2 匹の鯉をあらわす双魚の紋様は、金代に流行した主題紋様である。内区は波涛紋で埋められている。外縁部に官鋳を示す官府験記と思われる刻記があるが、本鏡においては彫りが微細なため判読不可能である。

No.17　双魚紋鏡

No.17　双魚紋鏡

資料番号 51-42（1985：I-41）　金　直径 9.0cm　重量 107g（紐を含む）

主紋構成は No.16 と同様だが、本鏡は粗雑な作りの小型鏡であり私鋳品と考えられる。

No.18　波涛船舶八稜鏡

0　5cm

No.18　波涛船舶八稜鏡

資料番号 65-10　高麗　直径 17.0cm　重量 388g

銘文：煌丕昌天

高波の海上を一艘の船が航行している様子を描いている。船尾に 3 人の人物がおり、その近くの水面には龍が上半身を出している。宋代から金代頃にかけて、中国東北地方から朝鮮半島で多く見られる形式である。

No.19　双龍鏡

No.19　双龍鏡

資料番号 63-7（1985：I-42）　高麗あるいは宋　直径 23.0cm　重量 1162g

花弁紋鈕座の周囲に突線がめぐり、その外側に堂々たる体躯の龍を 2 体配する。三爪の龍が、珠玉を飲みこもうとしている。最外周には飛雲紋が並ぶ。

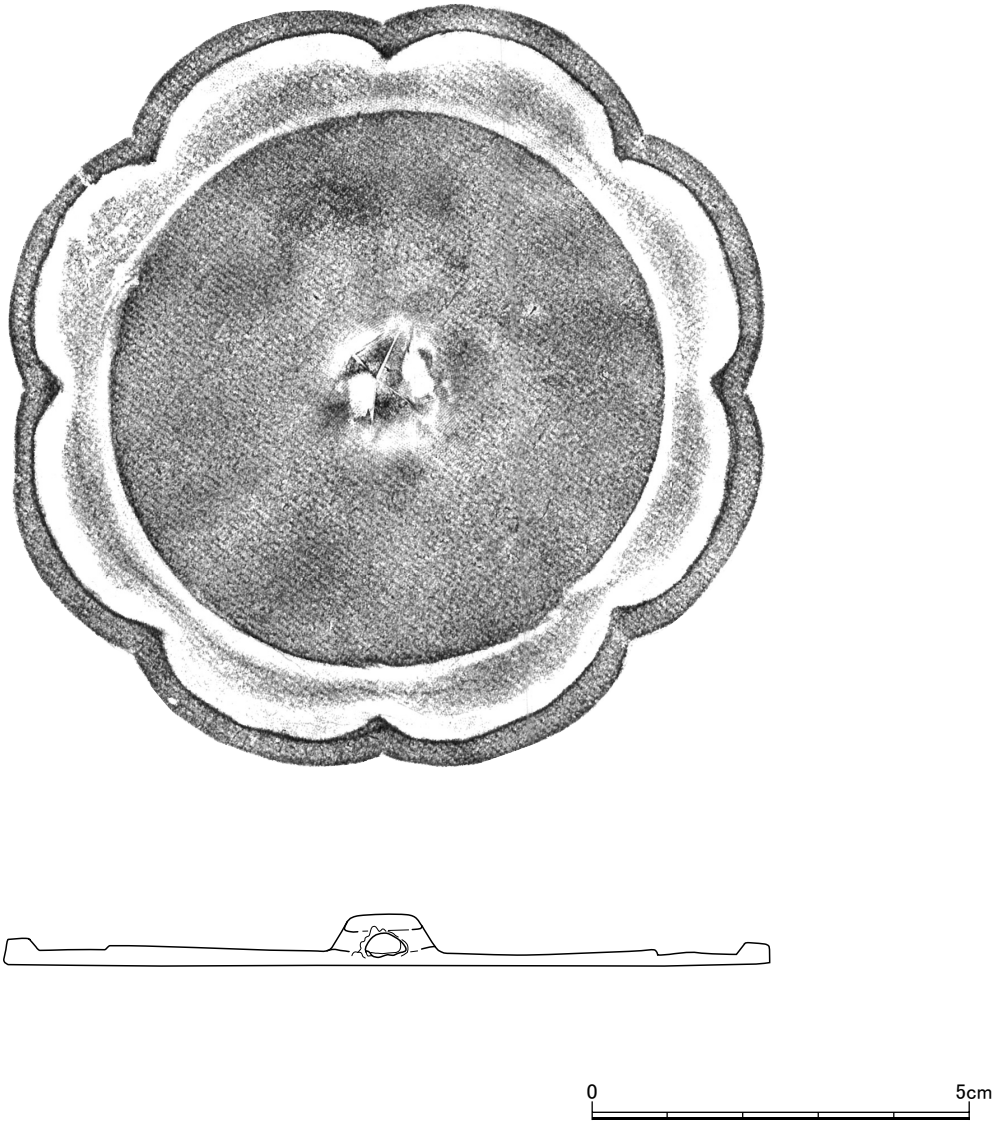
No.20　龍紋鏡方形鏡

No.20　龍紋方形鏡

資料番号 65-9　高麗　14.2 × 14.2cm　重量 376g

三爪の龍が大きく口を開き、珠玉に見立てた鈕を食もうとしている。龍の体躯には細かな格子目が刻まれている。

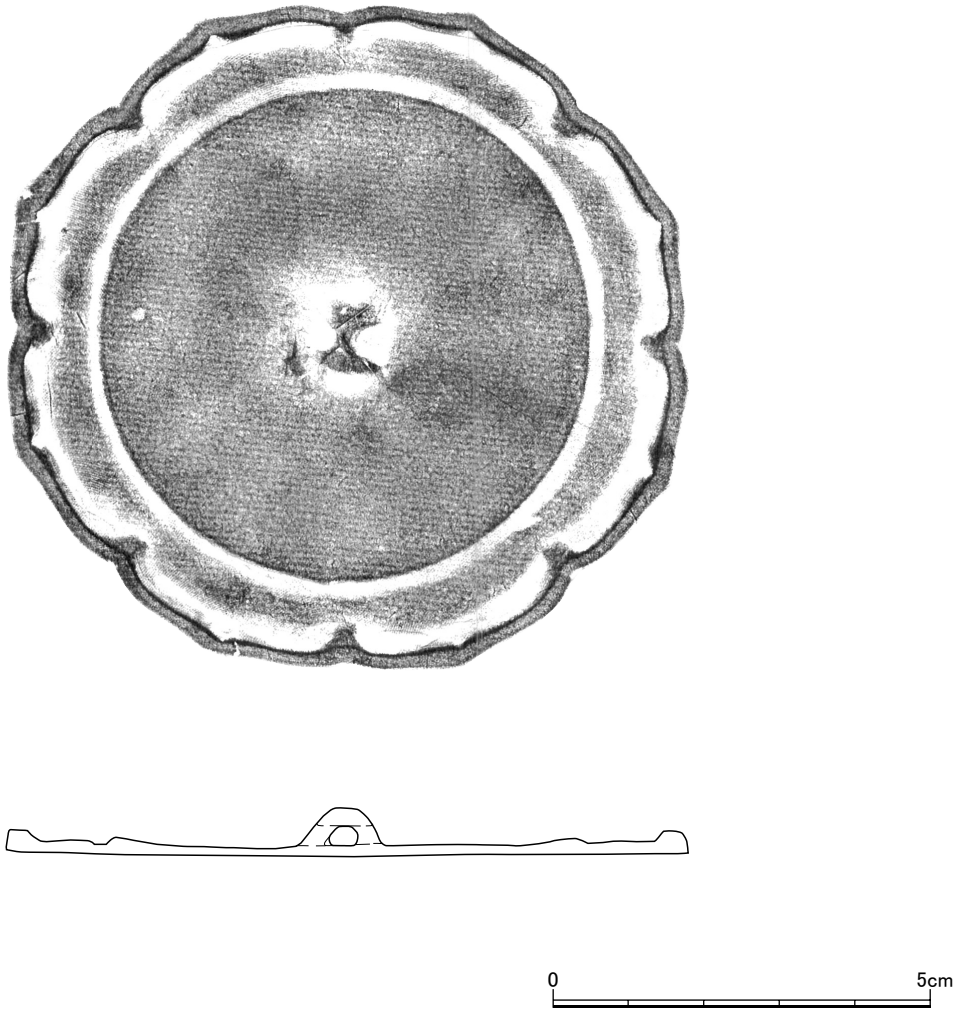
No.21　素紋八花鏡



No.21　素紋八花鏡

資料番号 65-11　高麗　直径 10.4cm　重量 128g

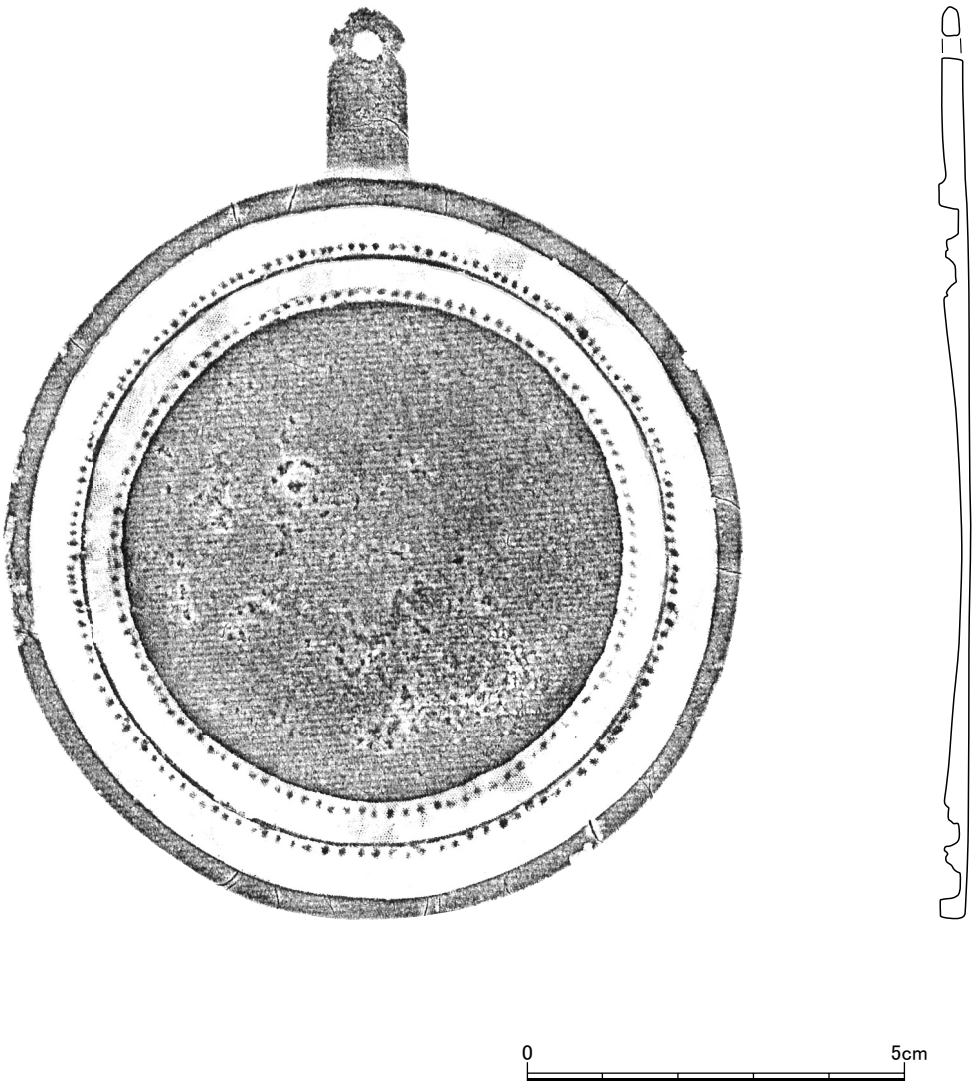
No.22　素紋八稜鏡



No.22　素紋八稜鏡

資料番号 65-12　高麗　直径 9.0cm　重量 85g

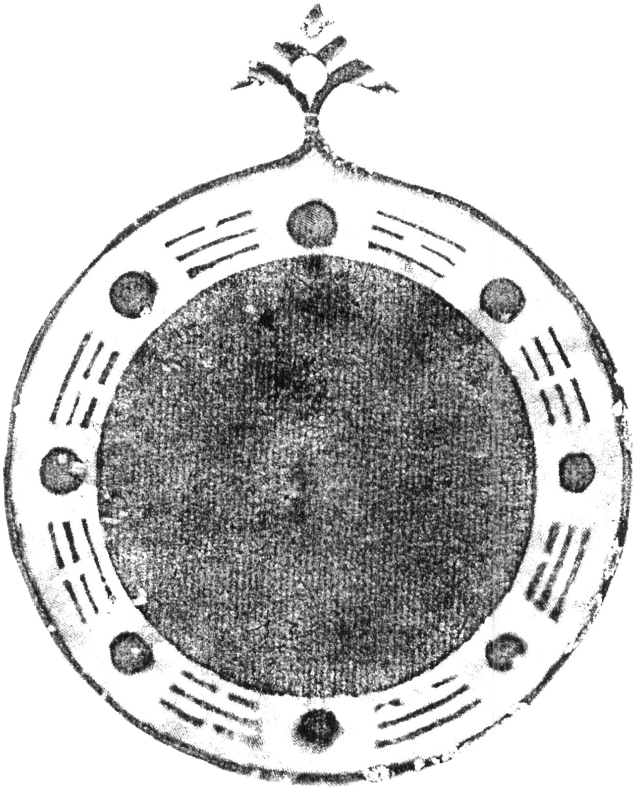
No.23　素紋懸鏡



No.23　素紋懸鏡

資料番号 65-22　高麗　全長 12.8cm 円形部分径 9.8cm　重量 113g

No.24　八卦紋懸鏡



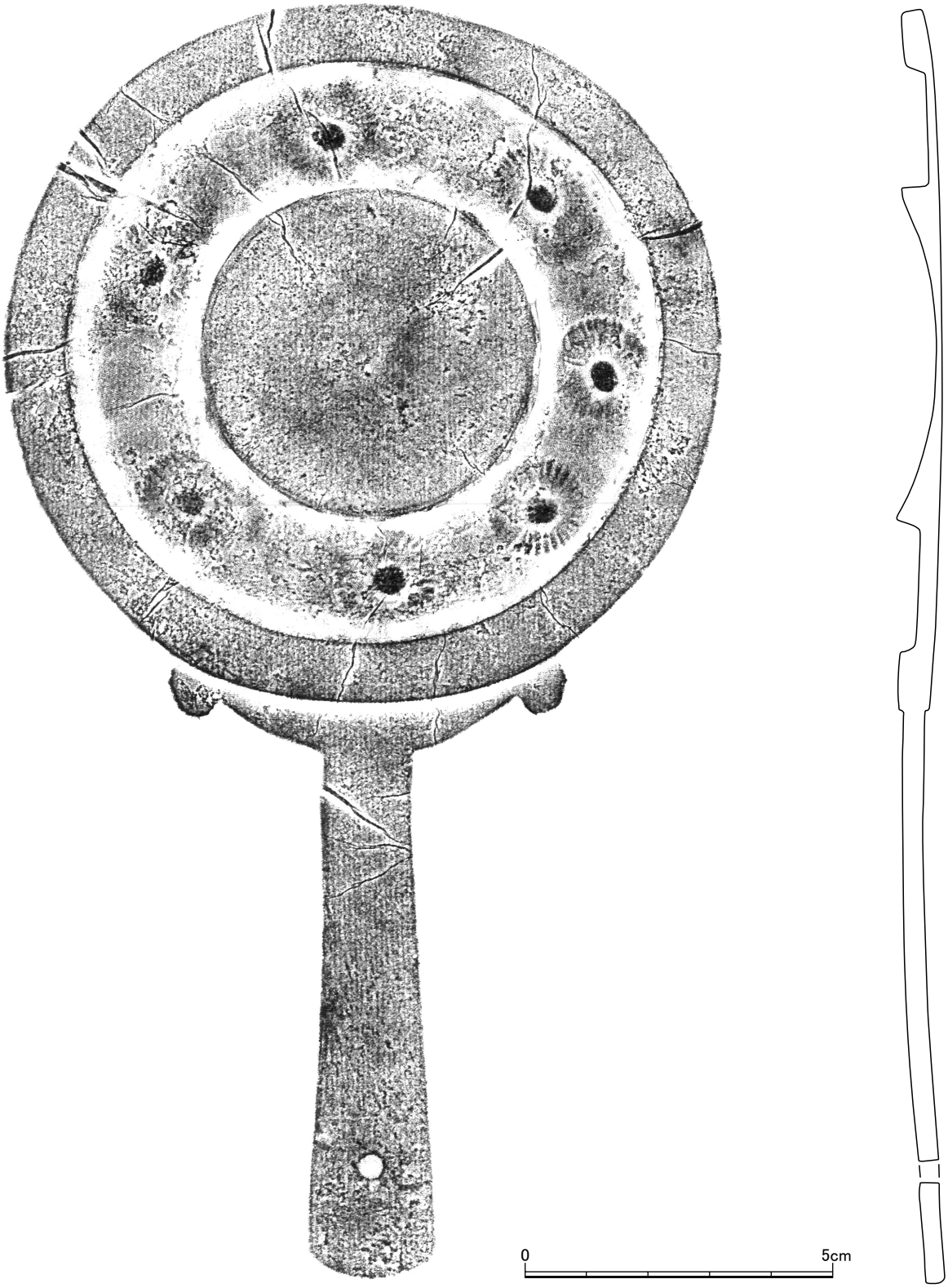
0　5cm

No.24　八卦紋懸鏡

資料番号 65-18　高麗　全長 10.0cm 円形部分径 8.2cm　重量 154g

外周に円形紋と八卦紋をめぐらす。中央の鏡面部分は凹面をなしている。上部の柄中央には小孔があり吊るせるようになっている。

No.25　菊花紋柄鏡

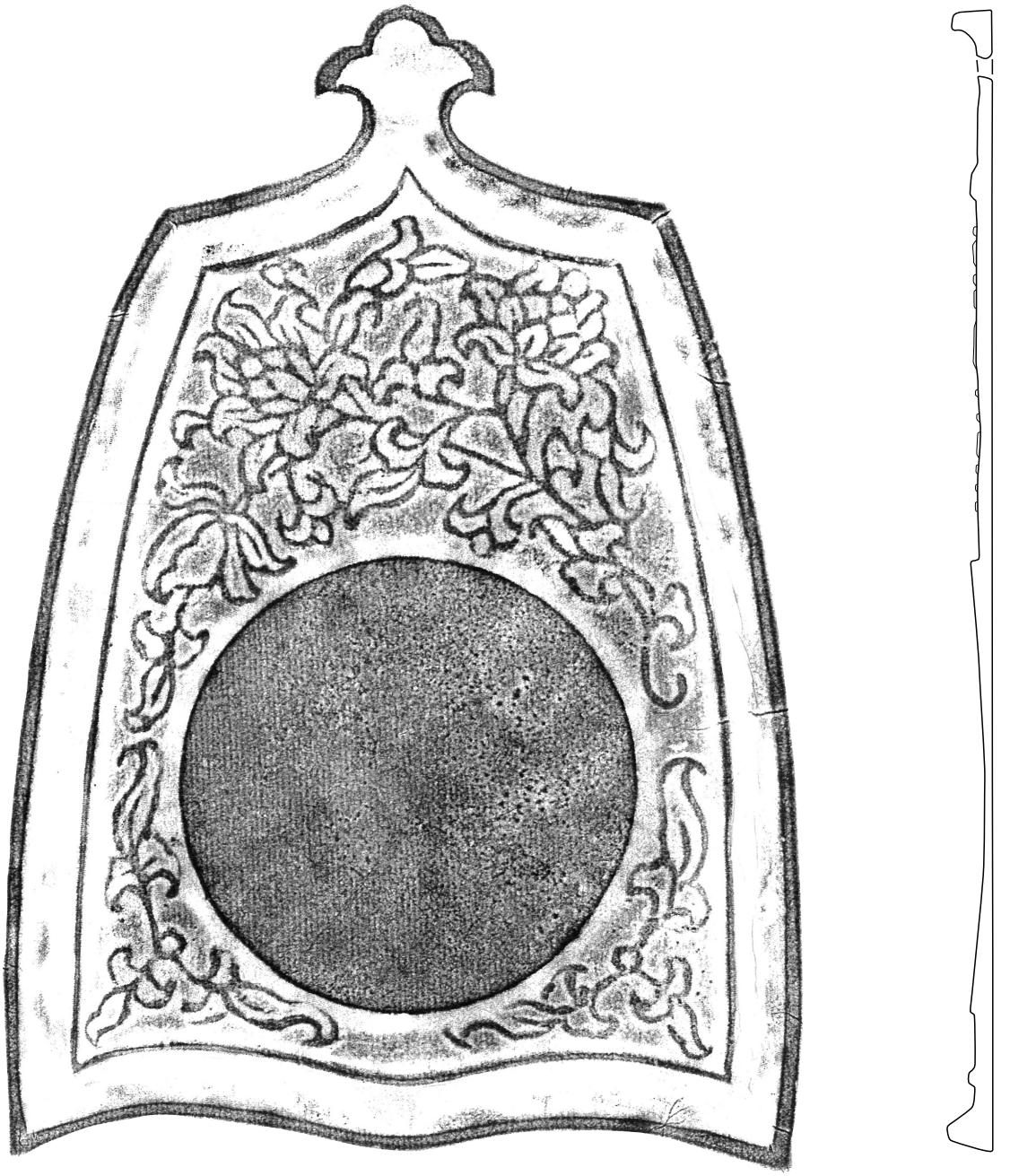


No.25　菊花紋柄鏡

資料番号 65-15　高麗　全長 20.7cm 円形部分径 10.4cm　重量 314g

7 つの菊花紋を配す。周縁より高い縁をもつ中央部分は、無紋の凹面となっている。

No.26　花紋鐘形懸鏡



No.26　花紋鐘形懸鏡

資料番号 65-16　高麗　16.9 × 11.7cm　重量 314g

全体が鐘形をなしている。花枝紋で囲まれた内区下部には凹面の鏡面がある。花枝紋の表面は磨かれて平らになっている。

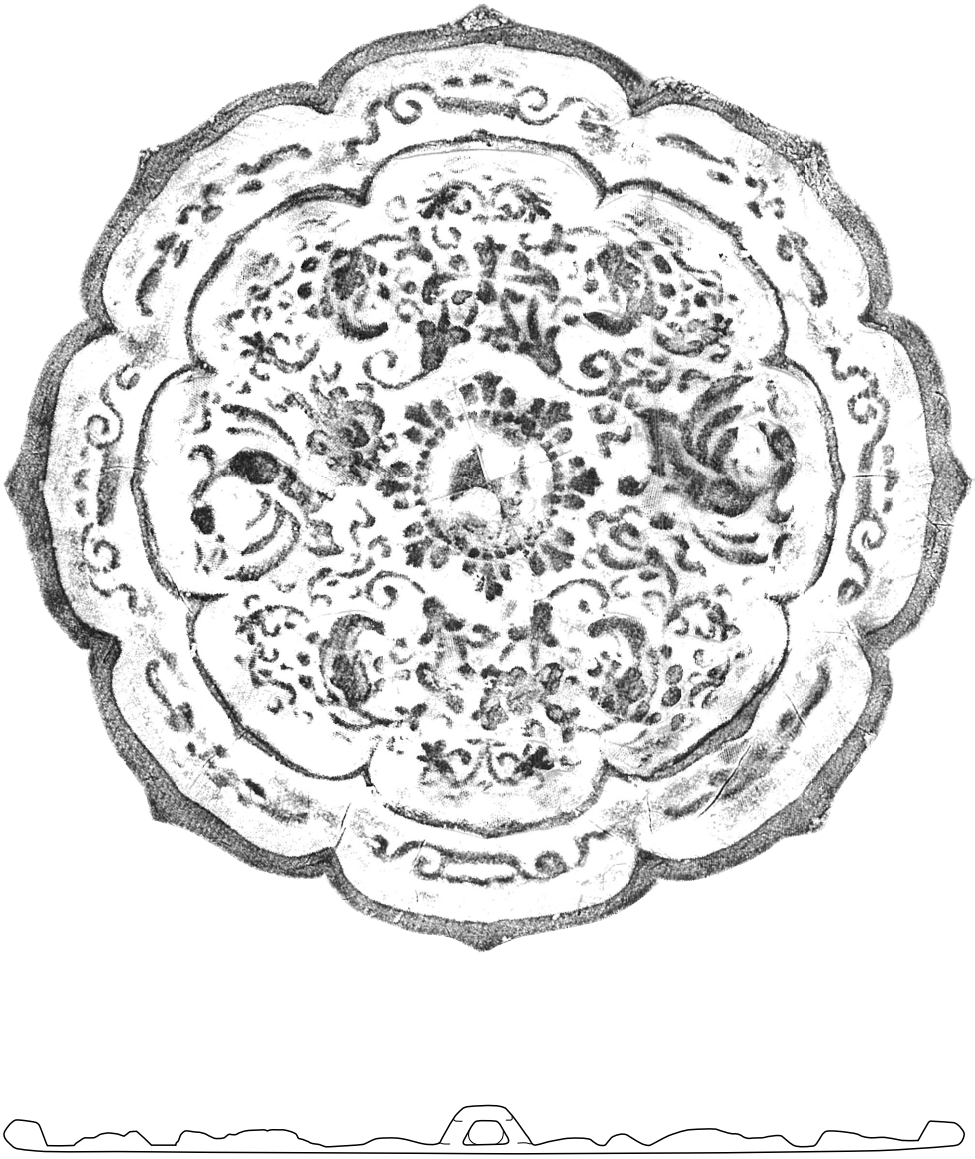
No.27　銀象嵌花紋懸鏡

No.27　銀象嵌花紋懸鏡

資料番号 65-19　高麗　全長 11.0cm 円形部分径 9.0cm　重量 127g

二重の珠紋圏帯の内側に、銀象嵌による花紋が描かれている。上部の柄は三叉形で、懸けるための小孔が中央にある。

No.28　瑞花双鳳八稜鏡

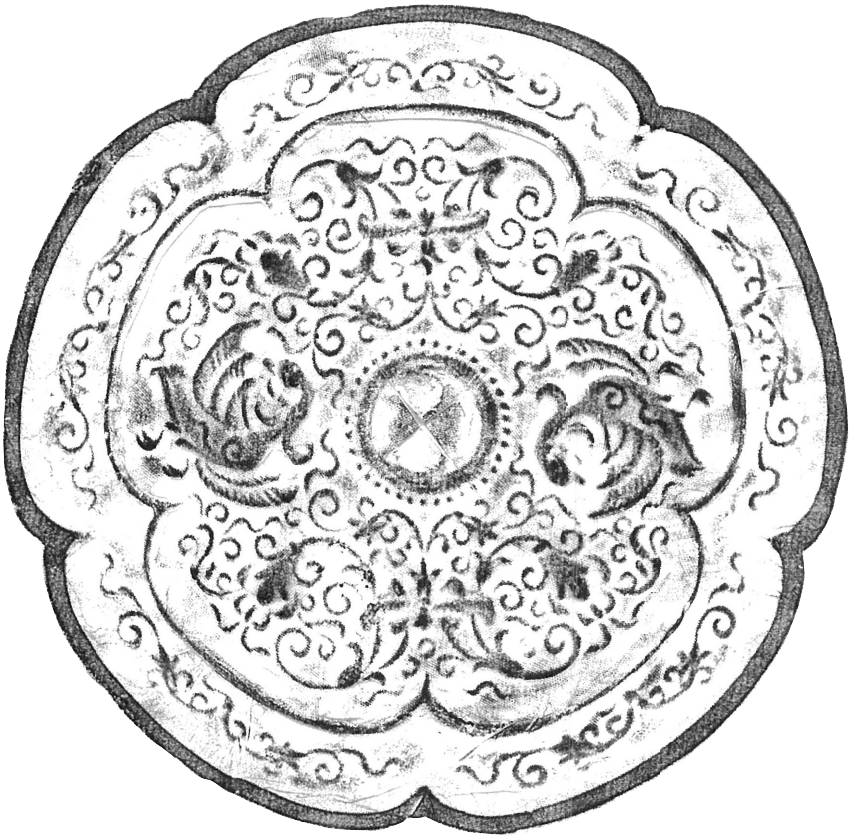


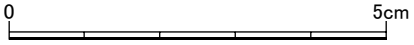
No.28　瑞花双鳳八稜鏡

資料番号 51-56　高麗　直径 12.9cm　重量 181g

原鏡は 12 世紀初め（平安時代後期）の和鏡。二羽の鴛鴦と、繁褥な瑞花唐草紋が配される。

No.29　瑞花鴛鴦五花鏡

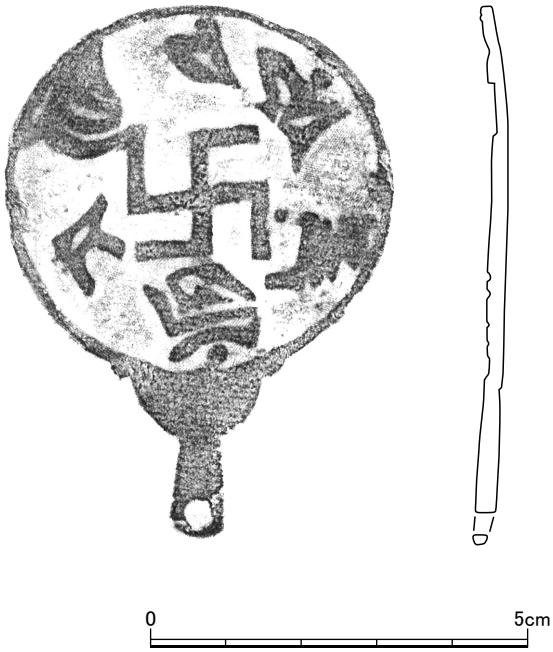




No.29　瑞花鴛鴦五花鏡

資料番号 65-14　高麗　直径 11.3cm　重量 192g

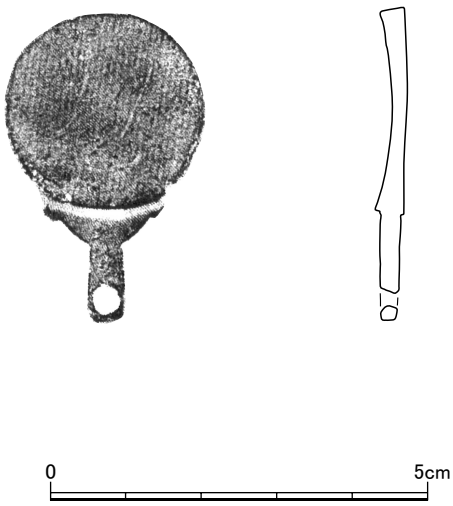
原鏡は 12 世紀前半（平安時代後期）の和鏡。元来は唐鏡をモチーフとしたものだが、五花は和鏡独自の形である。高麗ではこの種の模倣鏡が数形式作られた。



No.30　卍紋柄鏡

資料番号 65-17　朝鮮時代前期

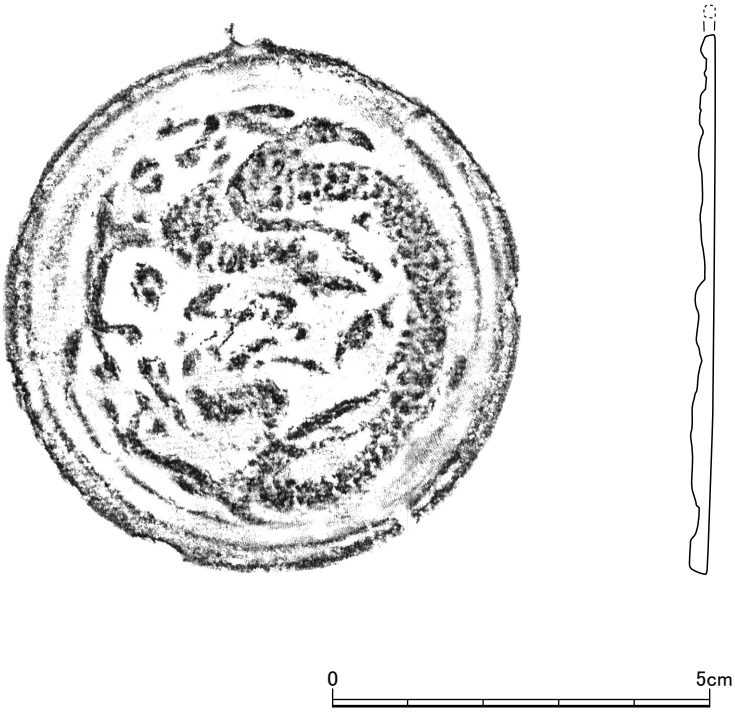
全長 7.0cm　円形部分径 5.3cm　重量 192g



No.31　素紋柄鏡

資料番号 65-21　高麗

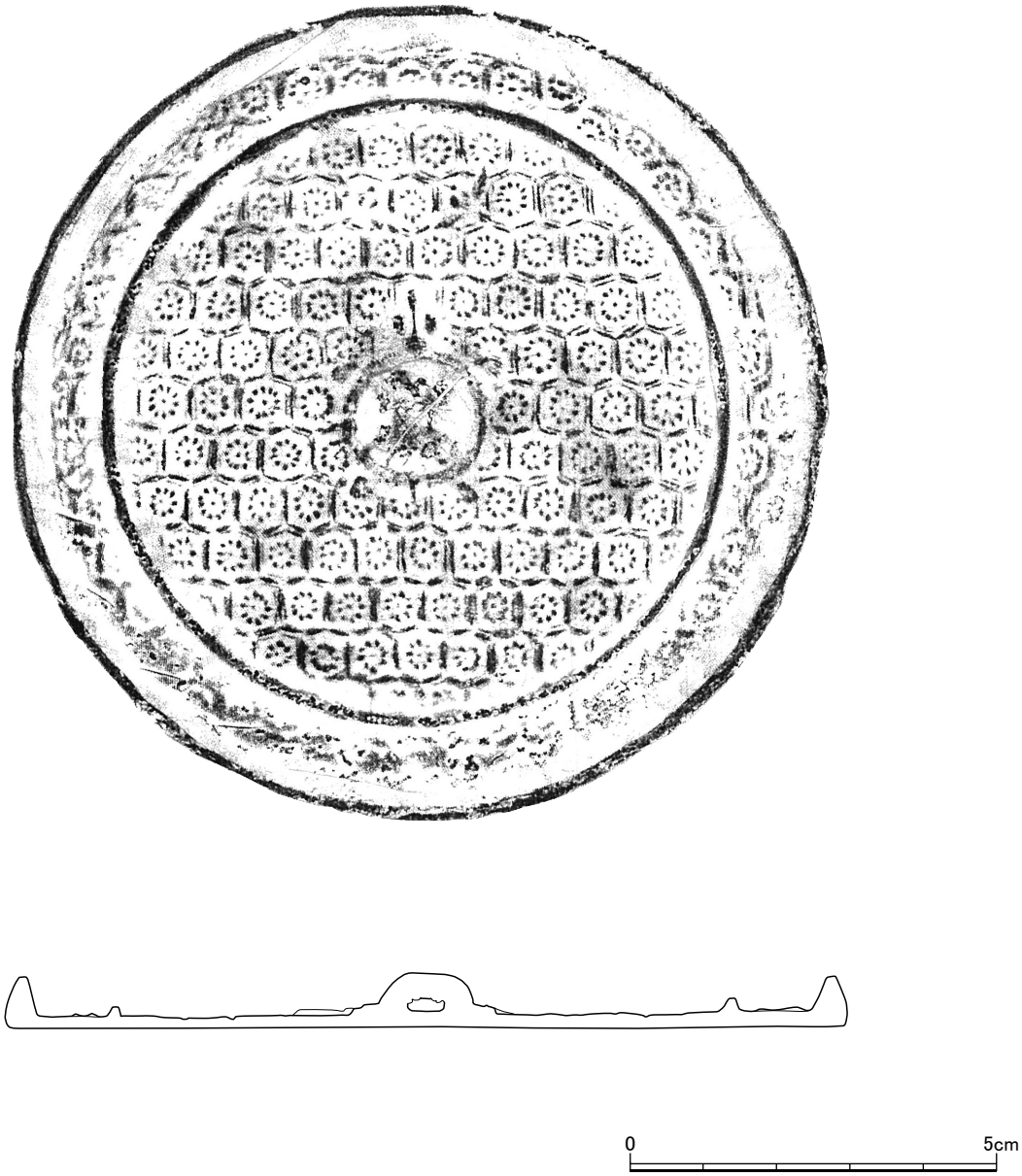
全長 4.2cm　円形部分径 2.8cm　重量 15g



No.32　龍紋懸鏡

資料番号 65-20　高麗　残存長 7.4cm　円形部分径 7.0cm　重量 53g（一部欠損）

No.33　亀甲紋鏡

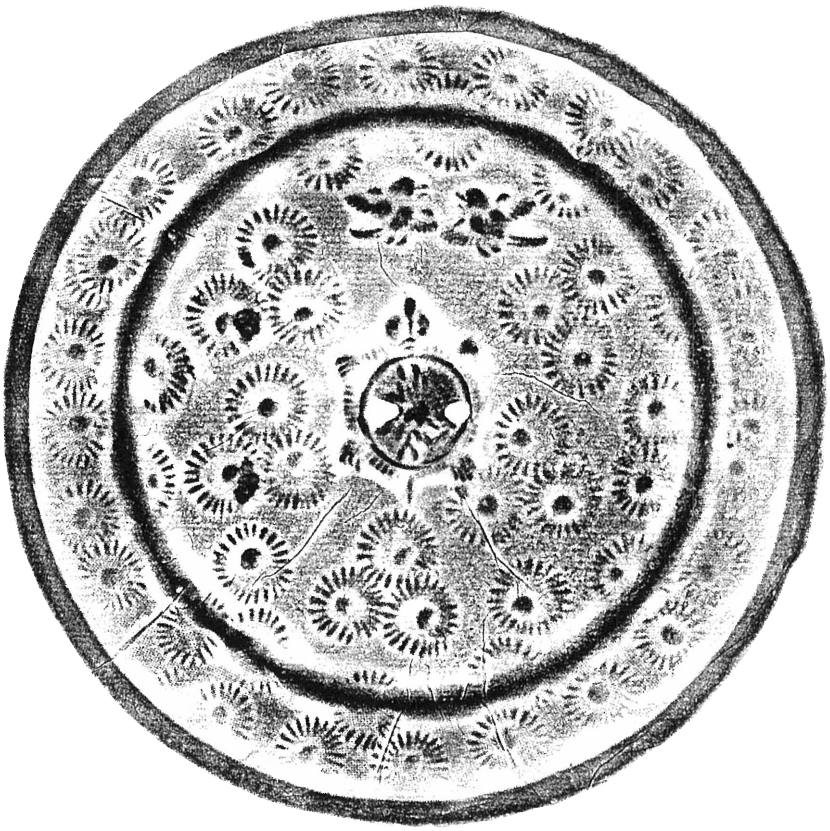


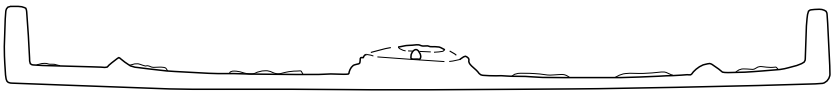
No.33　亀甲紋鏡

資料番号 65-13　高麗　直径 11.5cm　重量 222g

和鏡を原型として製作（踏み返し）したもの。高い周縁と圏線がめぐり、内区には花亀甲紋を敷き詰める。原鏡の和鏡は 14 世紀頃（室町時代）の形式である。本鏡は鈕孔形態や銅色が和鏡と異なっている。

No.34　菊花双鳥鏡



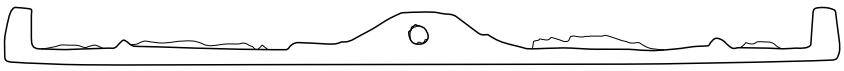


No.34　菊花双鳥鏡

資料番号 63-9　鎌倉（13 世紀）　直径 11.0cm　重量 309g

鈕は亀甲形で、甲羅に菊花菱紋をあらわす。上部に二羽の鳥を配し、全体に菊花紋を散らしている。

No.35　洲浜松樹双鶴鏡

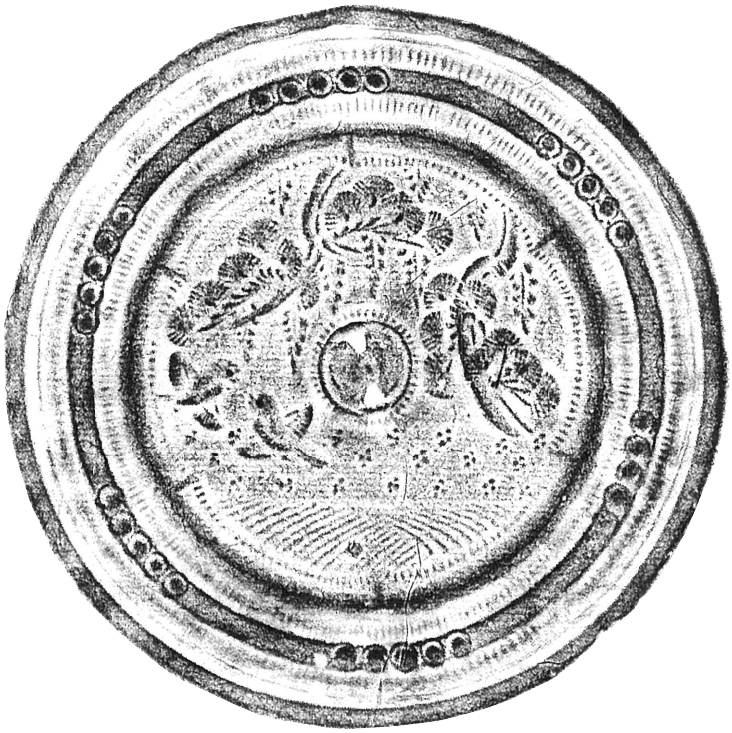


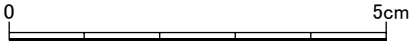
No.35　洲浜松樹双鶴鏡

資料番号 63-10　室町（14 世紀）　直径 11.0cm　重量 289g

亀甲鈕の甲羅には花亀甲紋があらわされる。洲浜に松、鶴という紋様は同時代の蒔絵など工芸品に見られる意匠と共通している。

No.36　洲浜松樹双鳥鏡



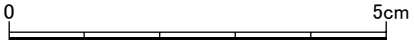


No.36　洲浜松樹双鳥鏡

資料番号 63-11　室町（14 世紀）　直径 9.6cm　重量 144g

14 世紀に流行した擬漢式鏡の一種。幅広の界圏を挟んで、漢鏡のような櫛歯紋が刻まれる。

No.37　蓬莱鏡



No.37　蓬莱鏡

資料番号 63-12　江戸（17 世紀前半）　直径 11.7cm　重量 694g

紋様が非常に立体的に彫りだされている。紋様の一部がオーバーハングしており、鋳型製作時に原型を使わず、篦押しで直接笵に紋様を刻む方法をとっていることがわかる。

No.38 「天下一」竹鶴方鏡

No.38 「天下一」竹鶴方鏡

資料番号 63-13　江戸（17 世紀）　10.0 × 8.0cm　重量 122g

銘文：天下一

砂目地の上に一羽の鶴と竹があらわされる。中世和鏡とは趣の異なる近世和鏡的な紋様構成となる。

美術博物館所蔵の鏡

本書収録鏡は 38 面あり、その帰属する地域・年代は中国前漢から日本近世までと幅広い。これらは 1951-67 年の間に収蔵されたもので、その期間はまさに当館の初代委員長である三上次男(1909-1987)の委員長在任期間に符合する。三上は東洋史・東洋考古学を専門とし、戦後はエジプトやイランなど各地で陶磁関係遺跡の調査をおこない、陶磁貿易史の研究分野を拓いた人物である。1951 年に美術博物館準備委員会が発足し、三上は委員長として参画した。しかし折からの資金不足と不景気のせいで思うように収蔵資料が集まらず、厚意による寄附あるいはそれに近い形での購入という形に頼らざるを得ず、そのために三上らは奔走した。こうした努力により集められた資料はおのずと三上自身の専門に近い東洋考古学の方面が大半となり、当館所蔵資料の根幹を成すこととなった。

本書収録の銅鏡も当該資料の一角を占めるものであり、中国漢鏡 7 面、唐鏡 3 面、宋遼金代の鏡 7 面、高麗鏡 16 面、日本中近世の鏡 5 面と、その内容は銅鏡史の概要を説明するのに足る構成となっている。考古学・古美術資料としての意義を持つだけでなく、美術博物館設立当時における三上らの情熱と目的意識を感じさせる資料群だといえる。

銅鏡は、顔や姿を写す道具である。19 世紀にガラス製の鏡が普及するまでは、主に金属製の鏡が使用されていた。その多くは青銅、つまり銅と錫の合金で作られた青銅鏡である。鏡は青銅工芸の中心として長い間製作され続けた。古代には姿見としての用途以外に、人の心を映したり、邪悪なものの正体を暴き、はね返したりする呪術力があると考えられていた。

漢代は唐代と並び、中国鏡最大の隆盛期である。前漢中期になると生産量は格段に増加し、当時の思想や流行を表した紋様が鏡背にあらわされた。前漢末には方格規矩四神鏡や内行花紋鏡（No.4）など多様な鏡式が生産されるようになる。No.1 草葉紋鏡は紋様構成や銘文の類似したものが、四川や関中あたりにみられるものである。No.5 盤龍鏡は大阪国分茶臼山古墳出土鏡などと同様の銘をもつ。

三国鏡のうち魏晋鏡は長方形鈕孔という特徴を共有する。この特徴は三角縁神獣鏡の一部にも見られ、中国製か日本製かで議論の分かれていた三角縁神獣鏡の製作地論争において、魏鏡説に大きな根拠を与えた。No.7 雲紋鏡は前漢の虺龍紋鏡をモチーフにした復古鏡で、長方形鈕孔をもつ。同様な紋様構成をもつ類例として河南省洛陽史家屯 1 号墓出土鏡などがあるが、こちらは主紋区の雲紋が 8 つ並び、外縁は素紋縁をとっている。

唐代は国際色が豊かになった時代であり、その彩り豊かな文化を反映した華やかな鏡が作られた。葡萄唐草やパルメットなど西方のモチーフを用いた華麗で豪華な紋様表現となり、神仙思想を主題にした漢鏡とは大きく趣が異なる。唐鏡を代表する形式は海獣葡萄鏡で、高く隆起した圏帯によって内外二区に分けられ、葡萄唐草や獅子、鳥などで埋め尽くされる（No.8）。

北宋末期～南宋代には、紋様らしいものをまったく持たず、ただ商標記号だけを記す鏡が増加する。「湖州鏡」はその代表的な鏡で No.12 湖州八稜鏡、No.13 湖州蜻蛉紋鏡がそれにあたる。また No.14 円圏規矩鏡のような漢鏡の復古製作も盛んに行われた。

唐以降の中国東北部に成立した遼（916-1125 年）、続く金（1115-1234 年）の鏡は、北方にあらわれた新興の鏡である。遼鏡は唐、五代鏡の遺風をとどめつつ、同時代である宋の鏡とも密接な関連をもつ。唐代に流行した高浮彫の技法を継承しない、浅い彫りの線描きによる施紋が主流となる。花、樹木、鳥など自然の事物をあらわした素朴な主題紋様が多い。連珠紋、亀甲紋や格子紋を鏡背いっぱいに敷き詰めて、花や蝶を配する連珠亀甲紋鏡類があり、No.15 四蝶方格紋鏡片はこの類である。

双魚紋鏡は代表的な金の鏡式で、吉林省、河北省、内蒙古自治区、甘粛省などで出土してい

る。面径は 8〜43cm と幅があり、その中には精緻な紋様と流麗な表現をもつ大型のものと、粗悪な鋳上がりの比較的小型のものがある。前者が官鋳品で、後者が私鋳品であるといわれている。金代には厳しい私鋳禁止令が布かれており、銅鏡はすべて官鋳であることを示す「官府験記」を必要としていた。その事実を裏付けるように、縁部に官府験記と花押が刻まれている鏡がある。No.16 双魚紋鏡の外縁部には十数字の刻記があり判読不能であるが、官府験記であろう。対して No.17 双魚紋鏡は 16 と比較し小型で、私鋳品とされている類の鏡である。

高麗鏡は当館所蔵鏡中最多数を占める。高麗鏡には中国や日本からもたらされたものをそのまま、あるいは一部を改変したものがあるが、和鏡を原鏡としたもののなかでは特に瑞花双鳳八稜鏡（No.28）が数多く製作されている。ほかにも松鶴鏡や菊花双鳥鏡などを原型とした鏡がある。No.33 亀甲紋鏡の原鏡は 14 世紀の和鏡であるが、銅色が高麗鏡に特徴的な緑白色を呈すこと、鈕孔形態が和鏡と異なることから、和鏡を踏み返して高麗で製作したものと考えられる。高麗鏡をめぐる問題として、同時代周辺地域の鏡との区別の問題がある。宋遼金鏡と高麗鏡は王朝を越えて形式を共有しており、紋様形式からは明確に線引きできない部分がある。No.18 波濤船舶八稜鏡、No.19 双龍鏡は高麗鏡の独自鏡式とされているものだが、出土範囲は広い。

日本独自の様式である和鏡が成立する過程である奈良平安時代には、中国の唐から多くの鏡が舶来した。また唐末から北宋のころ（10-11 世紀）にかけても中国鏡は断続的に流入した。唐鏡や宋鏡からの継続的な影響と、日本国内でのやまと絵や蒔絵など工芸装飾との密接な関係から生まれたのが和鏡であるといえる。12 世紀前半には高く直立した周縁と界圏がめぐる和鏡の鏡胎が定着し、以後の鏡の基本形態となり、江戸時代に入る 17 世紀ころまで継続した。

（岸本泰緒子）

参考文献

岡村秀典 1984「前漢鏡の様式と編年」『史林』第 67 巻第 5 号

岸本泰緒子 2009「前漢鏡の地域性について-陝西省西安を中心に-」『駒澤考古』第 34 号

久保智康 1999『日本の美術　第 394 号　中世・近世の鏡』至文堂

車崎正彦編 2002『考古資料大観　第 5 巻　弥生・古墳時代　鏡』小学館

孔祥星・劉一曼 1984『中国古代銅鏡』文物出版社（邦訳版：高倉洋彰・田崎博之・渡辺芳郎訳 1991『図説中国古代銅鏡史』海鳥社）

泉屋博古館編 2004『泉屋博古　鏡鑑編』便利堂

泉屋博古館編 2006『唐鏡』便利堂

中野政樹 1998「高麗鏡」『世界美術大全集　東洋編』第 10 巻　高句麗・百済・新羅・高麗、菊竹淳一・吉田宏志編、小学館

樋口隆康 1979『古鏡』『古鏡図録』新潮社

劉淑娟 1997『遼代銅鏡研究』瀋陽出版社

李蘭暎 1983『韓国の銅鏡』芸術研究室編、韓国精神文化研究院

東京大学総合文化研究科・教養学部　美術博物館
資料集 3　－銅鏡－

2010 年 3 月 29 日　発行
編集・発行　〒 153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学総合文化研究科・教養学部　美術博物館

印刷　(有) 平電子印刷
〒 970-8024　福島県いわき市平北白土字西ノ内 13